

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

学徒出陣の記憶とその受容について：現代学生への記憶伝承とその認識の検証を通して

著者	馬場 憲一
出版者	法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
雑誌名	現代福祉研究
巻	19
ページ	5-26
発行年	2019-03-01
URL	http://doi.org/10.15002/00021709

学徒出陣の記憶とその受容について ー現代学生への記憶伝承とその認識の検証を通してー

馬 場 憲 一¹⁾

【抄録】 戦後日本の平和と繁栄は第2次世界大戦の惨禍の上に築かれたものとの認識で語られている。その惨禍の一つに挙げることができるのが、戦時下における「学徒出陣」であり、現在、その学徒出陣の事実を現代の若者たちにどのような形で伝えていくことができるのかが大きな課題と言える。そのため本稿では戦後50年を契機に各大学が実施してきた学徒出陣調査の取り組みと成果を述べ、法政大学の学徒出陣調査事業から明らかになった出陣学徒兵の全体像を示すとともに、学徒出陣調査事業の最終報告会における座談会で学徒出陣に関わるエピソードを聞いた学生たちがどのように受け止めたのか彼らが作成した感想文を分析し、学徒出陣の記憶がどのように受容されていたのかを検証した。その結果、出陣学徒の記憶が様々な形で認識され受容されている状況が明らかとなり、学徒出陣を体験した者の個々の記憶がそれを聞いた若い学生たちにたとえ記憶が変質し伝承されたとしても、その記憶が受容されることによって大きなインパクトを与えてきている事実を明らかにした。

【キーワード】 学徒出陣 記憶 学徒出陣調査事業 出陣学徒 戦争 平和 現代学生

はじめに

現在、戦後日本の平和と繁栄は第2次世界大戦の惨禍の上に築かれたものとの認識で語られることが多い¹⁾。その惨禍の一つに挙げることができるのが、第2次世界大戦末期の1943年(昭和

¹⁾ 一例を挙げると、天皇は自身が満85歳の誕生日を迎える三日前の2018年12月20日の記者会見で「先の大戦で多くの人命が失われ、また、我が国の戦後の平和と繁栄が、このような多くの犠牲と国民のたゆみない努力によって築かれたものである」(『朝日新聞』2018年12月23日付朝刊の記事「記者会見録」)と述べており、その認識は多くの国民が共有している第2次世界大戦に対する「集合的記憶」の一つと捉えることができる。集合的記憶について論じた著書にM.アルヴァックス著/小関藤一郎訳『集合的記憶』(行路社1989年)がある。なお記憶についてはこれまで戦争被害者の問題や国民国家論の中で論じられ、前著をはじめアライダ・アスマン著/安川晴基訳『想起の空間 文化的記憶の形態と変遷』(水声社2007年)など多くの研究蓄積があるが、本稿はそれら研究の成果を踏まえての執筆ではないことをお断りしておく。その点については後稿に譲ることにしたい。

¹⁾ 法政大学名誉教授

18)10月以降に、若い学生たちを戦場に送り出した「学徒出陣」であり、その学徒出陣の事実を戦争を知らない現代の若者たちに戦争の悲劇を風化させないためにどのような形で伝えていくことができるのかは戦後70数年を過ぎた現在、平和を考える上で大きな課題と考える。

ところで、戦時下の学生を戦場に送り出した当事者である大学は終戦直後から暫らくの間は大学の負の歴史である学徒出陣について語ることはほとんどなかったが、戦後50年の節目を迎えた頃から大学は組織を挙げて学徒出陣の事実を調査し、各大学における学徒出陣の実態とその歴史を明らかにするようになってきた。そのような中で筆者が所属している法政大学でも2012年度から6年の歳月をかけて学徒出陣調査事業を実施した。法政大学の調査事業は、学徒出陣者数や戦没者数、ならびにその名簿などを明らかにするとともに、学徒出陣を体験した卒業生から聞き取り調査を行い、学徒出陣体験者の「記憶」にもとづく語りを録音し文字に起こし紙媒体の「記録」にまとめ証言集として刊行した。そして、この調査事業には「次代を担う学生たちに学徒出陣という負の歴史を伝え、広く社会に戦争の愚かさを訴えていくことにある」との意図もあった²。

以上のような状況を踏まえ、本稿では近年、各大学で実施してきた学徒出陣調査の取り組みとその成果を明らかにし、同時に法政大学での調査の概要を述べ、次にインタビュー調査の対象となった法政大学出陣学徒の姿をイメージできるように調査で明らかになった個々のデータにもとづきその出陣学徒像を示すことにした。そして最後に法政大学の学徒出陣体験者へのインタビュー調査で得られたエピソードなどを紹介した座談会で、登壇者の発言を聞いた学生の感想文を記憶の伝承と認識、受容という視点から分析し、現代の若者(学生)が学徒出陣の記憶をどのように受け止めていたのかを検証し考察していくことにした³。

1. 大学における学徒出陣調査とその成果

(1) 1995年以降の学徒出陣調査への取り組み

戦後50年を迎えた1995年以降、各大学が戦時下の学徒出陣に向き合いどのような調査を行ってきたのか、その状況を取り組んだ大学順にみていくことにする⁴。

まず、東京大学では東京大学史史料室が吉川弘之総長(当時)の東京大学の果たすべき責任として、

² 『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』の「序文」。

³ 筆者は「福祉」(=Well-being)の原点は「人権」を尊重することにあると考えている。その人権がもっとも抑圧され否定されるのが「戦争」である。このため本稿の執筆にあたっても戦時下における人権という問題を意識しながら考察することにした。

⁴ ここで紹介する各大学の学徒出陣調査の取り組みについては、法政大学史センターに架蔵されている調査報告書を参照して執筆した。このため全国の大学で実施し見落としている学徒出陣調査もあることをお断りしておく。

それまで放置されてきた学徒動員、学徒出陣に関する調査を行うとの思いにもとづく依頼を受けて、2年半にわたる調査を実施し1998年1月に『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学出版会）を刊行している。同書は総長に提出された報告書をもとに編集されたもので、東京大学の学徒動員の実態と学徒出陣者や戦没者などの統計と分析などが戦時下の諸相とともに全601頁にまとめられている。

京都大学は同大学文書館が京都大学における学徒出陣の実態を明らかにすることを目的に「総長裁量経費」を申請し採択され、2004年度・2005年度に約409万円の経費をかけて京都大学の学徒出陣調査を行っている。調査の成果は2006年3月と7月に2巻にまとめられ、『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』（京都大学大学文書館）として刊行されている。同書に収録されている内容は京都大学における学徒出陣に関する在学生の基礎的データと関係資料、18名の軍隊生活体験者に聞き取りを行った記録で全2巻計748頁にまとめられている。

明治大学では2010年3月に『戦争と明治大学－明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員－』（明治大学 全410頁）を同大学史資料センターが編集して刊行している。同書は明治大学校友会が主体となって行った同大学の戦没者を祀る護国神社(新潟県)の忠霊殿建立に伴い大学史資料センターが協力して行った関連調査の報告書であり、太平洋戦争での戦没者、出征者を集大成している⁵。

専修大学では2015年10月に『専修大学史資料集 第7巻－専修大学と学徒出陣－』（専修大学出版局）を刊行している。この資料集は同大学創立150年に向けた事業の一環で調査し編集されたもので、戦争を体験した学生および教職員の手記をはじめ、学生からの聞き取り・アンケート回答、戦時中の同大学に関わる史料などによって構成されている。同書は596頁におよぶ大部な資料集で、発行が戦後70年の節目にあたるどころから大学が学徒出陣にどのように関わったかを史料から理解してもらうことを目的に作成されたものである。

日本大学は2000年2月に刊行した『日本大学百年史』（第2巻）に「日本大学からの出征」が掲載されているが、「不十分な内容のまま」での脱稿であったことにより、大学史を担当する職員は「後悔の念」を残していた。そのため大学史編纂担当職員は出陣学徒への聞き取りや戦跡の調査を行い、学徒出陣壮行会から75年目の2018年12月に同大学出身学徒兵の人数や戦没者名簿、学徒兵やその関係者への聞き取り調査の成果などを収録した『日本大学学徒兵調査報告書』（日本大学企画広報部広報課 全83頁）を発行している。

このように戦後50年から75年にかけて管見の限りでは「学徒出陣」について、大学が組織とし

⁵ 明治大学の報告書刊行の経緯については、同大学史資料センターに伺って記述した。

て調査に関わり主体的に行っている事例はそれほど多くなかったことがわかる⁶。

(2) 法政大学の学徒出陣への取り組み

法政大学は1988年から総長に就任していた阿利莫二(1995年まで在任)の発案によって戦没学生の調査を行い、学徒出陣から47年目の1990年3月の卒業式に、学徒出陣し大学に戻らなかった学生の遺族に対し卒業証を授与し、初めて第2次世界大戦に関わった法政大学のあり方を社会に問いかける姿勢を示した⁷。

しかし、その後、四半世紀、戦時下の大学の歴史、特に学徒出陣の実態を解明する調査は十分に行われることはなかった。そのような状況下で、終戦から50年目にあたる1995年に経済学部同窓会が学徒出陣や勤労動員された不幸な時代を在学生や留学生に語り継ぐために「平和祈念碑」を建立し記憶の継承を図っていた。また2011年度から「自校教育」が導入され法政大学の負の歴史である学徒出陣について講義が始まった。

そのような状況の中で「法政大学と出陣学徒」事業が2012年度から大学史委員会の手によって6カ年計画で開始された。その事業の目的は法政大学における学徒出陣の実態と全容を明らかにし、その成果を自校教育に活かし学生たちの修学意識の向上を目指し、さらに大学として戦時下における大学の道義的責任を思考し平和に取り組む姿勢を示すことであった。

調査では学徒出陣者数および戦没者数の確認を行い、学籍簿、離籍者名簿、戦没者名簿などから学徒出陣者数を調査終了時点で3,395名、戦没者数を694名とした。そして存命の学徒出陣者42名とその関係者1名、勤労動員者2名に聞き取り調査を実施し貴重な証言を得ている。また調査に関連して学徒出陣者戦没遺族が所蔵する所持品や大学内と外部機関などに現存する公文書等も収集し目録を作成している。

調査で得られた成果については、2013年12月16日に公開シンポジウム「学び舎から戦場へー学

⁶ 大学が組織として「学徒出陣」調査を実施し編集された単独の報告書はそれほど多くなかったが、大学関係者が個人として第二次世界大戦に向き合い学徒出陣を調査し刊行された著作物は管見の限り以下のようなものがある。このような成果から学徒出陣調査が個人の問題関心の中で取り組まれてきた状況にあることが理解できる。『証言 太平洋戦争下の慶應義塾』(白井厚ほか編 慶應義塾大学出版会 2003年11月)、『大学における戦没者追悼を考える』(白井厚著 2012年11月)、『敗戦60年 戦争はまだ終わっていないー謝罪と赦しと和解とー』(青山学院大学プロジェクト95 2005年8月)、『ミッション・スクールと戦争ー立教学院のディレンマ』(老川慶喜ほか編 東信堂 2008年3月)、『中央評論 特集 戦争を生きた先輩たち いま後輩へ伝えたいこと』(中央評論編集部 2008年5月)、『戦争を生きた先輩たちー平和を生きる大学生が取材し、学んだことⅠ』(松野良一監修 2010年8月)、『戦争を生きた先輩たちー平和を生きる大学生が取材し、学んだことⅡ』(松野良一監修 2010年10月)、『文系私立大学における学徒出陣の基礎的研究』(新井勝紘編 2017年3月)。

⁷ 『法政大学と出陣学徒 (「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』(法政大学 2017年3月)7頁。以下、この(2)の項の執筆にあたっては、特に断らない限り、同書を参照した。

徒出陣70年 法政大学の取り組み」、2015年11月23日に中間報告会「戦後70年 法政大学と出陣学徒－記憶と記録」、2017年12月8日に最終報告会「法政大学と出陣学徒－「法政大学と出陣学徒」事業最終報告会－」をそれぞれ開催し調査成果を公開で学内外に発信するとともに、それらのシンポジウムや報告会にあわせて、2013年12月に記念展示会「学び舎から戦場へ－学徒出陣70年 法政大学の取り組み」や、2017年12月には収集された史資料を公開するための展示会も開催している。また報告書として『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』(2017年3月 全294頁)、『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下) 第1分冊』(2018年3月 全314頁)、『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下) 第2分冊』(2018年3月 全346頁)の計3冊を刊行した。

法政大学の学徒出陣調査は、同大学史委員会が主宰し、その委員会の指示のもと大学史編纂業務を担当する大学史センターがその実務を担い大学の組織を挙げ6年の歳月をかけ取り組まれた事業である。そのため法政大学として学徒出陣を総括し、卒業生へのアンケート調査、統計調査、聞き取り調査など各種の調査結果を分析し、全体で954頁におよぶ報告書は法政大学の学徒出陣の実態を明らかにしている。特に聞き取り調査をした45名(うち1名は遺族の希望により非掲載)の証言については、全660頁におよぶ証言集にまとめて刊行されており、学徒出陣研究の深化に貢献するものとして評価されている⁸。

2. 法政大学の学徒出陣と学徒兵

(1) 法政大学の学徒出陣の概要

一般に学徒出陣については、1943年(昭和18)10月21日に明治神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行会からというイメージが強いが、広義の学徒出陣は修業年限が3ヵ月間短縮して1941年12月に卒業し、1942年2月に入隊した卒業生の時に始まる。この時、法政大学から何名が入隊したかなどについては不明であるが、「学徒出陣の先駆」と言われる海軍予備学生の募集が1943年5月、陸軍特別操縦見習士官の募集が1943年7月に行われており、この海軍予備学生に志願して応募した法政大学の学生は469名であった⁹。

1943年9月22日のラジオ放送で東条英機首相が学生の徴兵猶予撤廃などを演説し、同年10月2日には「在学徴集延期臨時特例」が公布されているが、法政大学では学部学生のうち4分の3が

⁸ 『毎日新聞』2018年6月7日付夕刊の文化面に「Topics 法政大学の学徒出陣調査 当事者の貴重な証言集 研究の深化に貢献」という見出しで出陣学徒の証言集刊行の記事(栗原俊雄記者執筆)が掲載されている。

⁹ 『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』(法政大学 2017年3月)42頁。以下、この(1)の項の執筆にあたっては、同書37頁～50頁(奥武則氏執筆)を参照した。

同年10月15日までに臨時の徴兵検査を受けていた。10月15日には入営予定学生の壮行会が法政大学の講堂で開催され、壮行会終了後には出陣学徒を先頭に校門を出発し宮城(皇居)前に赴き整列し万歳奉唱を行い解散している。

この後、同年10月21日に前述のように明治神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会が文部省と学校報国団本部主催で行われ、東京都と神奈川、埼玉、千葉の各県に所在する大学、高等学校、専門学校77校約25,000名が参加しているが、法政大学からは出陣学徒の壮行会への参加は強制ではなかったようで、数百人ほどの学徒が参加していたと考えられる。そして、これ以後、法政大学からは多くの学生が学徒兵として戦地に赴いているが、現在、判明している学徒出陣者の数は3,395名である。

(2) 法政大学の出陣学徒像

法政大学の学徒出陣は本節2の(1)のような状況であったが、2012年8月から2015年9月まで3カ年をかけて実施した聞き取り調査では法政大学から出陣した学徒兵の個々の情報を収集した。ここではそれらの情報から聞き取り調査した学徒兵の全体像を明らかにし、法政大学の出陣学徒の具体的な姿に迫るとともに、次節3で紹介する出陣学徒の記憶がどのような中で形成されてきたものかを検討しておくことにする¹⁰。

① 学徒出陣体験者のインタビュー時の年齢

聞き取り調査でインタビューができた学徒出陣者は42名である。

聞き取り調査した段階での年齢をみていくと、最高年齢は関貢氏(番号2)¹¹の95歳、最少年齢は88歳で清家豊雄氏(番号5)など8名がいた。平均年齢でみていくと90.3歳であり、学徒出陣には20歳前後で行っているの、聞き取った内容はだいたい70年前の回想といえることができる。

② 学徒出陣体験者の生年と出身地

学徒出陣体験者の生年をみていくと、1919年(大正8)2名、1920年(大正9)1名、1921年(大正10)4名、1922年(大正11)7名、1923年(大正12)6名、1924年(大正13)11名、1925年(大正14)7名、1926年(大正15)4名で、1921年(大正10)～1925年(大正14)が全体の8割強を占め、大半が大正末

¹⁰ この(2)の項では25～26頁に掲載した「法政大学学徒出陣・学徒動員聞き取り者一覧表」を参照のこと。同一一覧表は『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(法政大学 2018年3月)と『同(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第2分冊』(法政大学 2018年3月)を参照し作成した。なおそれら事業報告書の「凡例」には、証言の「掲載に際しては、証言者ご本人もしくはご遺族にご校正とご承諾をいただいた」とあり、事業報告書は「法政大学研究倫理規程」に則り個人情報の取り扱いに十分配慮し刊行されたものと認識している。

¹¹ 番号は一覧表上の該当者の番号を示す。以下、同じ。

年の生まれで、昭和金融恐慌が起こり、軍部が台頭し日中戦争が勃発して軍事色が強くなってきた時代に幼年期から少年期を過ごしていた若者たちであったことが浮かび上がってくる。

出身地をみていくと、東京19名、東京以外の関東は10名で、それ以外に九州6名、東海3名、中国地方2名、関西1名、朝鮮1名などであった。この数字から当時の法政大学が全国から入学者が集まってくる大学であったが、相対的にみると聞き取り調査した学徒出陣者はその約7割弱が東京を含む関東の出身者であったことがわかる¹²。

③ 学徒出陣体験者の入学の年度・学部と卒業学部

聞き取り調査した学徒出陣体験者の法政大学に入学した年度をみていくと、1936年(昭和11)度1名、1939年(昭和14)度4名、1940年(昭和15)度6名、1941年(昭和16)度7名、1942年(昭和17)度13名、1943年(昭和18)度6名、1944年(昭和19)度4名、1945年(昭和20)度1名で、聞き取り調査をした出陣学徒の約6割近くが第2次世界大戦開戦(日米開戦)後の入学で、法政大学での学生生活を戦時下で迎えていたことがわかる。

また入学した学部などは予科26名、専門部15名(内訳は法律科3名、政治経済科7名、高等商業部4名、大陸部1名)、航空工業専門学校1名、学部2名(法文学部政治経済学科2名)で、9割以上が法政大学の予科や専門部に入学してきていた¹³。しかし、卒業については学徒出陣し勉学を中断せざるを得なくなっていたが、戦後、復学した者を含め、卒業学部などは予科1名、専門部9名(内訳は法律科2名、政治経済科3名、高等商業部3名、大陸部1名)、工業専門学校2名、学部32名(内訳は法文学部法律学科1名、同学部政治経済学科6名、同学部文学科1名、経済学部経済学科23名、同学部商業学科1名)となっており、7割以上が法政大学の学部を卒業し、うち75%が経済学部の学生として卒業していた。これは当時、経済学部の在籍定員が非常に多かったことに起因するものと考ええる。

④ 学徒出陣体験者の法政大学での生活と在籍年数

大学に入学してからの生活をみていくと、働きながら通学する者もいたが、時代を反映し陸上部、剣道部、野球部、射撃部、自転車競技部、山岳部、ハンドボール部、馬術部など体育会系の部活に

¹² 現在、判明している法政大学からの学徒出陣者の総数は3,395名で、うち本籍地が関東地方である者は1,300名(全体の38.3%)であった(『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』121頁)。

¹³ なお、判明している法政大学からの学徒出陣者3,395名の出征時の学部学科は予科381名、専門部1,124名(内訳は法律科167名、政治経済科462名、高等商業部244名、大陸部87名、高等師範部164名)、航空工業専門学校62名、学部1,828名(内訳は法文学部473名、経済学部1,355名)であった(『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』120頁)。

励み、学校生活を送る者も多くいた。また一方で、演劇活動はじめ、図書館で読書し仲間と哲学の勉強会を開催したり、英語の修得に頑張っている者、さらに予科の自由な寮生活を謳歌している者もいた。

そのような中で、法政大学に入学してから軍隊に行くまでの期間をみていくと、中島高明氏(番号38)のように1945年4月に専門部法律科に入学した直後に21歳で入隊した者もあり、その期間は長短あるが、平均で2年7ヵ月であり、全体に法政大学に在籍していた年数はそれほど長くなかったように考えられる。

⑤ 学徒出陣体験者の入隊年次と入隊年齢

出陣学徒の入隊年次は1942年(昭和17)2名、1943年(昭和18)16名、1944年(昭和19)13名、1945年(昭和20)11名で、1943年10月21日の明治神宮外苑競技場の出陣学徒壮行会が開かれた年度以前に卒業し徴兵されて入隊している者が2名いたが、残りの40名はすべて出陣学徒壮行会以降に入隊していた¹⁴。

そのため入隊時の年齢をみていくと、18歳3名、19歳8名、20歳15名、21歳9名、22歳6名、25歳1名となっており、1943年12月24日に勅令「徴兵適齢臨時特例」が公布され徴兵年齢が引き下げられていく時期に入学してきた者もいたので、年齢幅は18歳～25歳と大きかった。入隊の平均年齢は20.3歳で7割以上が19歳～21歳で軍隊に入隊していた。

⑥ 学徒出陣体験者の軍隊生活の年数と赴任・復員

軍隊生活がもっとも長かったのは関貢氏(番号2)で4年11ヵ月であったが、保田英男氏(番号27)のように終戦間近い1945年(昭和20)8月1日に入隊し、終戦後、復員するまで3日間軍隊にいて除隊になったので、その入隊期間が僅か18日という者もいた。そのため軍隊生活には長短があり、平均で1年6ヵ月であったが、前出の関貢氏のように捕虜生活を含め5年近くも実質的に軍隊生活を送っているような者もいた。

軍隊での配属先を陸軍・海軍別でみていくと、陸軍が34名で圧倒的に多く、海軍は8名であった。陸軍に入隊した者の多くは歩兵や砲隊に所属し、なかには近衛師団に入隊したものや、航空隊に志願し整備兵として勤務に就いている者もいた。海軍に入隊した8名のうち1名を除きすべて茨城県百里原などで飛行訓練を受け飛行隊に所属していた。

¹⁴ 法政大学からの学徒出陣者 3,395 名の出征年次は、年次不明者 462 名を除き 1943 年(昭和 18) 1,476 名、1944 年(昭和 19) 655 名、1945 年(昭和 20) 802 名であった(『法政大学と出陣学徒(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 上)』120 頁)。

このようにして軍隊生活を送っていた出陣学徒の軍隊での赴任地をみていくと、内地に赴任している者が30名と多く、内地以外ではシンガポール、スマトラ、ジャワ、レンパン島などの南方と、中国の南京、台湾、朝鮮、満州などに12名が赴いており、聞き取り調査した出陣学徒のうち3割ぐらいが外地に赴任していた。

1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受託して終戦を迎えるが、出陣した学徒たちは戦争が終わったその年の暮れまでに7割以上の32名が除隊となり復員していた。しかし外地に赴任していた多くの者は終戦の翌1946年8名、翌々年の1947年に2名が復員してきており、今回の聞き取り調査の対象になった者の中には現地で捕虜生活を過ごし長期間抑留されていた者もあり、復員するまでに厳しい状況下に置かれていた者もいた。

3. 出陣学徒の記憶と現代学生

(1) 「法政大学と出陣学徒」事業最終報告会の概要

法政大学が6年の歳月をかけて取り組んできた法政大学における出陣学徒調査については、2017年12月8日、法政大学の市ヶ谷キャンパスでその調査の最終報告会が学内外から約120名の参加者を得て開催された。その次第は、以下のようなものであった。

- 1 開会の挨拶
- 2 法政大学における学徒出陣調査最終報告
- 3 座談会
- 4 講評
- 5 質疑応答
- 6 閉会の挨拶

このように最終報告会は開会の挨拶に始まり、学徒出陣調査の最終報告、座談会、講評、質疑応答などの内容で2時間(午後5時30分～午後7時30分)を費やして実施された。その内容を簡単に紹介していくと、まず最終報告会の次第の「2 法政大学における学徒出陣調査報告」¹⁵では、調査概要として調査の目的、調査期間、本調査の取り組みとその成果、さらに聞き取り調査で得られた情報から被調査者(学徒出陣体験者)の全体像を分析した報告があり、最後に収集資料の公開、調査成果の教育の場での活用、帰還しなかった学徒兵の声との向き合い方など今後の課題が述べられた。

¹⁵ 大学史委員会委員長の筆者が担当して行った。



最終報告会の会場風景



座談会の様子と登壇者

ついで座談会では学徒出陣調査に関わった大学史委員会委員などが登壇し、司会者のもと次のようなテーマにしたがって、それぞれ登壇者が学徒出陣体験者に聞き取り調査した折に収集した印象に残るエピソードなどが紹介された¹⁶。

〔座談会でのテーマ〕

(1) 戦時下の大学生生活

- ① 戦時下の法政大学および大学の状況
- ② 戦時下の学生生活
- ③ 徴兵猶予停止時の心境
- ④ 出陣学徒壮行会

(2) 軍隊生活

- ① 学徒兵の特殊性
- ② 学徒兵が得ていた情報
- ③ 軍隊内での暴力や不条理
- ④ 戦闘経験と特攻
- ⑤ 大局的な戦争観と敗戦の予感

(3) 戦後体験

- ① 八月一五日の終戦
- ② 捕虜生活と抑留体験

(4) 本事業の意義・課題

この座談会をうけて田中優子法政大学総長による講評が行われ、その後、座談会で話された内

¹⁶ 登壇者は奥武則元教授、根崎光男教授、小林ふみ子教授、古俣達郎専門嘱託と筆者の5名で、司会は鈴木智道准教授が担当した。

容などについて参加者からの質問に答えるという形で質疑応答がなされた¹⁷。

（２）最終報告会座談会での報告内容と学生の感想

最終報告会座談会では、前述のように主に聞き取り調査で得られた成果を調査にあたった担当者が印象深く聞いたエピソードを座談会での各テーマに沿って披露していたが、ここではそれを聞いた参加者のうち戦後生まれの若い学生たちがどのように受け止めたのか、彼らが参加後に書いた感想文を通してその状況を検証していくことにする¹⁸。

① 戦時下の大学生活について

戦時下の法政大学および大学の状況についての話¹⁹を聞いた学生は、「大学自体は戦争参加の肯定を強いられているように感じる。当時は現在に比べ政府の力が強く、大学の意思決定にも多大な影響力を持っていた事が推測される」（A君 4年生 男性）と記し、法政大学が国家権力の前に学徒出陣などに反対できない状況にあったことを理解していた。

夜間学生で働きながら大学に来ていた関貢氏（番号2）の大学生活について、授業が終わってから公園で、みんなと社会主義がどうのとか、議論をやっていたら、そのことが警察に通報され、翌日警察で朝から午後遅くまで食事抜きで調べられ、関氏が「学生だからいろいろ議論したっていいじゃないですか」などと主張をしたら、「貴様、それだからいけないのだ。この野郎！」とやって殴られたというエピソード²⁰が紹介された。この話を聞き学生は「外濠のベンチで日本のあり方や社会主義体制に関して話をしただけで警官に拘束されたと聞いて、今では考えられないと思った」（D君 4年生 男性）との感想を記し、現在、自分たちが置かれている現状の中での政治意識を「平和ボケ」と吐露し、政治に関わる話をしただけで警察に拘束され、思想や言論の自由が許され

¹⁷ この最終報告会の様子は録音されテープ起こしされており、最終報告会での発言はすべて『学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下）第1分冊』（2018年3月）に収録されている。本節3の（2）（3）の執筆にあたってはこの最終報告会の記録をもとに論じた。

¹⁸ 最終報告会の座談会で披露されたエピソードは22あったが、それらのエピソードは学徒出陣を体験した話者（元学徒兵）の「記憶」にもとづく語りを調査者（大学史委員）が紙媒体の「記録」に編集し、その編集された「記録」を座談会に登壇した調査者がピックアップして語ったもので、参加学生は学徒出陣を体験した元学徒兵の語りを調査者を通して間接的に伝え聞いたことになる。学生の感想文は、筆者が法政大学現代福祉学部で2017年度秋学期に担当していた「地域文化政策論」の講義を受講していた学生が最終報告会参加後に書いたものである。参加した学生は筆者が講義時に告知した最終報告会開催の情報を得て出席し、筆者の求めに応じて任意に提出した感想文であり書式は区々であった。参加して感想文を提出した学生の内訳は、現代福祉学部学生7名（4年男性3名、3年男性2名、3年女性2名）、経済学部学生1名（4年男性1名）であった。なお感想文の公表については、提出時にそれぞれの学生から了解を得ているが、本稿では感想文を紹介する時には感想文を執筆した学生をランダムにアルファベット表記し学年と性別のみを記した。

¹⁹ 『学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下）第1分冊』（2018年3月）26頁～28頁。

²⁰ 『学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下）第1分冊』（2018年3月）30頁。

ない「息苦しい世の中」と表現して感想を記し、そのことが強く印象に残ったようである。

徴兵猶予停止の心境などについて、繰り上げ卒業になる直前の状況として立花通夫氏(番号3)の「学生服で銀座に遊びに行きましたら特高から『学生のくせになに昼間から遊んでいるんだ』と怒られ(特高に)連れて行かれた」という話²¹を聞き、一人の学生は「都内で昼に外にいるのを見かけられただけで特攻(高)に連れていかれるなど今からは想像もつかない事」(Cさん 3年生 女性)と記し、「(現在の)日々の生活に感謝するとともに、もっと学生として出来ることに励まなければならないという気持ちになりました」(前 同)との感想を述べている。

1943年(昭和18)10月21日の明治神宮外苑競技場で出陣学徒の壮行会が開かれているが、その壮行会については、出席するつもりで待機していた野村謙三氏(番号23)が雨降る中で待っているのが馬鹿らしくなって壮行会への参加を取り止め、日劇へ「くるみ割り人形」という歌劇を観に行ったという話²²が紹介されている。このエピソードに対しては、「壮行会のような行事には全員が勇んで参加していたのではないかと推測していたが、合流しようと待機していたが途中で帰ってしまった人がいたという話もあったように、壮行会そのものはそれほど重要なものと捉えられていなかったというのが興味深く感じた」(A君 4年生 男性)と当時の学生の行動に意外性を感じている。また「くるみ割り人形の公演を観に行き、どうせ死んでしまうなら..と最後の楽しみを名残惜しく思っていたという事を聞きました。(中略)私と当時同い年だった野村さんは、そのくるみ割り人形をどういう思いで見っていたのか、それを考えただけで胸がいっぱいで苦しかったです」(Bさん 3年生 女性)と感情移入する学生もいた。

② 軍隊生活について

学徒出陣した学徒兵について当時の大学への進学率などの点から登壇者が話した「法政大学に来る学生を含めて、当時の大学生は大変エリートだったということは、学徒出陣を考えるとときには頭に入れておかなければいけないことだと思います」²³との発言を聞き、参加学生の一人は「当時のエリートとも言える法政大学の学生がどのように戦争と関わっていたかを知る事は、非常に新鮮な経験であった」(A君 4年生 男性)と述べ、また別の学生は「学徒兵について詳しく知らなかったのですが、一般兵と大きく違いがあり、また、当時の大学生の数は数%であるのに、その大学生までも召集される程人が足りなく、余裕のない状況であったのだということが言葉からだけでも痛烈に伝わってきました」(Cさん 3年生 女性)と戦局の状況にまで思いを巡らしていた。

²¹ 『学徒出陣証言集 (「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下) 第1分冊』(2018年3月) 32頁。

²² 『学徒出陣証言集 (「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下) 第1分冊』(2018年3月) 33頁。

²³ 『学徒出陣証言集 (「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下) 第1分冊』(2018年3月) 34頁。

入隊した軍隊内での不条理な取り扱いに対して、相澤猛氏(番号18)を事例に大学出というだけで難癖をつけられ「殴る蹴るで、メガネを三つ持って行ったけれども、全部壊された」²⁴ とのエピソードが語られた。この話を聞き参加した一人の学生は「当時の学生は今でいうエリートであり、徴兵され幾ばくもない内に指揮監督する立場になる事があったというが、そのために他の兵の反感をかい、暴力を振るわれた事もあったという話は学生ならではのエピソードではないかと感じた。(中略)メガネを全て割られてしまったという話はその状況の過酷さを物語っており、生死をかけた毎日の中で出陣した学徒もその他の兵も心の余裕を持ってない生活が続いていたという事を感じさせられた」(A君 4年生 男性)との感想を記している。一方、他の学生はそのような仕打ちに対し「意外」と思い、その理由を「当時、戦争に行く方はとても偉大な扱いを受けていたという認識が僕の中であったからだ」(G君 4年生 男性)と自分の認識と聞いた話とのギャップに驚きを示していた。

また水野雅之氏(番号26)が志願して海軍に入隊し、そこでの出来事として、毎夜、寝ている時に上官の命令で急に起こされて3分ぐらいで毛布を畳んで整列する訓練で、全員が整列していないと鉄拳制裁を受けたという話²⁵ についても、参加学生は「当時の若者の戦争に対する辛く悲惨な思いがひしひしと伝わってきました」(Bさん 3年生 女性)とその軍隊内での学徒兵たちに対する行為は理不尽なものを受け止めていた。

戦闘経験と特攻の話では、判明している学徒兵の戦没者694名のうち40名が特攻によるものとの話²⁶ を聞き、「明るい将来が待っていたと思われる人たちが、負けが決まりきったような戦争で命を落としたと思うと非常に悔やまれる」(D君 4年生 男性)との感想を寄せる学生もいた。

さらに当時の戦争観や敗戦の予感などに対し、勤労動員された芳野東一郎氏(番号16)が動員先で部品を作るアメリカ製の機械を見て敗戦を予想したとの体験談が紹介されたが²⁷、それを聞いて、戦時下の「日本の無力」さを感じ取り、そのことを感想として記す学生(Bさん 3年生 女性)がいた。また敗戦の予感については、特に上島武雄氏(番号8)が『『こんなばかな戦争をなぜしたのだろう』という思いから、(中略)『もう駄目だと思った』(中略)『自分なんかは反戦論者の最先端だった』』との証言が紹介されると、学生たちの中には、自分が以前、戦争について聞いた人の中には「戦争は勝利に向かってしていると伝えられており、末期までは戦況は優勢だと思っていたと語る人も多く、その点でも今まで伝え聞いていた戦争体験と異なり印象深かった」(A君 4年生 男性)と記す学生もいた。またそれらの証言に対し「学徒の中には敗戦を確信していた人も少な

²⁴ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)35頁。

²⁵ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)36頁。

²⁶ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)37頁。

²⁷ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)39頁。

らずいたと聞いたが、死ぬとわかっていて兵士となる気持ちは私の想像を絶する」(D君 4年生 男性)ものとその感慨を語る学生もあり、当然ながら一つの紹介された証言を聞いてもそれぞれの学生で受け止めかたが異なっていた。

③ 戦後体験について

1945年(昭和20)8月15日の終戦を迎えた時のエピソードの一つとして、小村茂氏(番号17)が語った「終戦を聞いて、何しろ学校へ戻れることが非常にうれしいと感じた。仲間と会える、また勉強できることが非常にうれしかった」²⁸ との話が紹介されたが、その話を聞き、「本当にプライベートな時間、自分の時間、自由などが遮断されていたのだということが伝わってきました」(Cさん 3年生 女性)と当時の学徒兵が置かれていた状況を再認識するような感想も寄せられた。

また終戦を迎え岡山の実家に帰った水野雅之氏(番号26)が虚無感の中で自分自身をコントロールできなくなって、刀剣をもって「近くの山に入って、思い切って木を切り倒した」という話²⁹ に対しては、「自由から遮断され、一種洗脳ようになっていたかもしれない」(Cさん 3年生 女性)と当時の心理状態を分析し学徒兵が置かれていた状況について感想を述べる学生もいた。

戦後の捕虜生活と抑留体験については、竹内章一郎氏(番号41)のシベリア抑留体験を紹介した話³⁰ を聞き、シベリア抑留生活など「今の時代からは想像できないような様々なことが起きていたと知りました」(G君 4年生 男性)と記し、シベリア抑留体験の話の中に新しく負の歴史を知った学生もいたようである。

④ 本事業の意義と課題について

座談会では法政大学の学徒出陣体験者から聞き取った大学生活、軍隊生活、終戦後の様子などを登壇者がインタビュー調査し聞いてそれぞれ印象に残ったエピソードを紹介したが、最後に学徒出陣調査事業の意義や課題について、司会者に促され登壇者はその考えや想いを話した。

その一つに長文になるが、以下のような発言があった³¹。

私は事業の課題について、戦没者の思いとか、学徒出陣して今回、証言された方の声や調査の成果をどのように伝えていったらいいのかということで一言申し上げたいと思います。

「法政大学における学徒出陣」というのは大日本帝国憲法下での悲劇的な出来事の一つだと

²⁸ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)41頁。

²⁹ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)41頁。

³⁰ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)42頁～43頁。

³¹ 『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(2018年3月)43頁～44頁。

思います。ご存じのように、大日本帝国憲法の第二十条に「日本臣民ハ（中略）兵役ノ義務ヲ有ス」と書いてあります。国の最高規範の中にそういうことが書かれているので、徴兵されて若い人たちが悲惨な目に遭ったのだらうなと思っております。そういう悲惨な出来事の反省の中で生まれたのが現行の日本国憲法だと思います。皆さんもよくご存じだと思いますが、現在の憲法は非常に人権に配慮した憲法です。全文一〇三条ですが、その約三分の一は国民の権利という、基本的人権を守ることに最も重きを置いています。戦前の憲法下で起こった学徒出陣という人権を無視した不幸な出来事について、平和主義に貫かれた現行憲法下の時代と比較させながら、当時、学徒出陣して亡くなられた方や学徒出陣を体験した方々の思いを伝えていくことが、事業終了後には非常に大切なことになるのではないかとこの事業を六年間担当してきて、そのことがこれからの課題の一つになるのではないかと非常に強く思いました。

同時に、近年、「改憲」ということが一部の政党や政治家によって発信されていますが、若い方々に現行憲法が学徒出陣という不幸な出来事とともに戦争という悲惨な体験をした当時の人びとの想いの中から「不戦」という考えをベースに誕生したものであるということを知ってほしいと思います。「改憲」を唱える前に是非、学徒出陣という歴史的事実とともに現行憲法制定の背景についても学んでほしいと思っています。

これは学徒出陣が1989年(明治22)2月11日に公布された大日本帝国憲法の下での悲劇的な出来事であり、その反省の中から平和主義に貫かれ人権に配慮した日本国憲法が制定されているので、学徒出陣した人の想いを現行憲法下の時代と比較しながら伝え、若者に近年の「改憲」問題を論ずる前に学徒出陣の歴史的事実とともに現行憲法制定の背景を学んで欲しいという趣旨での発言であった。

これに対し参加学生からは「日本国憲法の存在についてもう一度強く考えるべきだとも感じた。現在、憲法9条の改正について様々な議論が行われているが、私たちのような戦争を知らない世代は、この問題をあまり重大に受け止めていない節が少なからずあるように感じる。しかし、日本国憲法は多くの犠牲の下に成り立つものであり、我々日本国民はその憲法の重要性を深く受け止め、改正の是非についてよく検討した上でしっかりとした持論を持つことが必要であると考え」(A君 4年生 男性)という感想が寄せられた。

(3) 最終報告会参加学生の報告会全体の印象と感想

最終報告会に参加した学生が2時間の報告会全体で何を得て何を感じたのか、出陣学徒兵の記憶伝承という視点からみていくと非常に興味深いものがある。以下、参加学生の感想文をもとに検

証していくことにする。

報告会参加の動機について、学徒出陣については知る機会がなかったので「私と同じ法政大学の学生であった方がどのような思いで、学徒出陣をしていたのか聞きたいと思い、報告会に参加させていただきました」(Cさん 3年生 女性)とあるように、知的興味関心から参加した学生もいた。また、或る学生は報告会に参加する前は学徒出陣についての認識は「戦時中一般兵の人数では足りない仕事や雑用を現役の男子学生達が補う為、戦地へ向かうというものでした。戦地へ向かうと言っても学生ですし、まさか一般兵と共に戦い敵軍へ向かっていくという事はないだろうと思っていました」(Bさん 3年生 女性)と記し、「私は、当時の人々はみな国のために忠義を尽くし死ぬことすら厭わないという考えであると思っていた」(D君 4年生 男性)と記す学生もおり、その学徒出陣に対するイメージは様々であった。

そのような学生たちが報告会に参加し全体の話聞いてどのような感想をもったのか、アトランダムにそれらの感想を列挙すると以下ようになった。

- ① 「今後戦争について考える上で貴重な情報となった。特に悲惨な戦争体験のみならず、当時の学生がどのような生活を送っていたか、といった事も併せてヒアリングしまとめてくださった事で、私たちの世代が大先輩である当時の学生に感情移入する事を容易にしたと考える。今まで、自分が聞いてきた戦争体験はあまりにも日常とかけ離れており、自分の事として想像する事が難しい場合もあったが、今回の調査報告では今までよりも強く戦争の状況をイメージする事が出来た。」(A君 4年生 男性)
- ② 「私と同年代だった男子学生達が、この歳で常に死と隣り合わせで過ごしていた事への驚きです。法政大学からはデータ上3395名の学生が学徒出陣をしたと見られ、その中のおおよそ5分の1となる694名が戦地で命を落としていた事を知りました。当時の国の戦争に対する雰囲気や、一般市民の生活など、今までテレビや新聞で何度か見たことがありました。しかし、こんなに身近な母校の卒業生が当時どういう思いをして過ごしていたか、それを知る事ができるのは本当に貴重な経験だと思います。(中略) 同時にもう2度と、同じ過ちを犯してはならないと強く思います。」(Bさん 3年生 女性)
- ③ 「戦争を知っている年代の方が少なくなっており、いなくなってしまう時の近さを感じてとても怖くなりました。いずれこのような時がくるとわかってはいても、これから戦争を知らない世代だけになってしまうのだと改めて感じました。戦争を知らない世代がどのようにして戦争の恐さを知っていくのかが、今後考えていくべきことであるように感じました。(中略) 私が今こうして大学生として日々健康に過ごせていることは、本当に幸せで有難いことなのだと改めて思いました。」(Cさん 3年生 女性)

- ④ 「当時の大学生というのはいわゆるエリートであり、命の重さに差をつけるわけではないが、そのような人まで戦争に向かわせているのは愚行としか言いようがないと感じた。（中略）私たちと同じように、将来に希望を抱いていた同年代の学生が、意思とは関係なく道が閉ざされてしまったという事実に、私たちは考えること・生きること・平和を維持すること等様々な義務を負っていると考えます。いま私たちがこのように暮らせていることも戦争を含めたすべての歴史の上にあるのだと改めて痛感させられた。」（D君 4年生 男性）
- ⑤ 「（感じたことは）戦争の残酷さである。言ってしまうと私たちの先輩である人たちが戦地へ行って、命を落としていたわけだ。私たちと同年代の人が戦地へ行く。学びたいことが学べない。そんなことがあって本当にいいのだろうか。ヒアリング調査の一人一人の賢明な声を受け止めていきたいし、それを後世にもっと伝えていきたい。もう死んだ人たちは帰ってこないが、その人たちの想いを受け止めることはできる。それを伝えていきたい。本気でそう感じた。（中略）戦争を風化させてはいけなと心から感じた。」（E君 3年生 男性）
- ⑥ 「様々な学部の方からの調査報告を聞くことができ、非常に勉強になりました。私も法政大学の学生の一員として、同じ大学生が太平洋戦争に巻き込まれて危険な戦地に行き、戦闘を行ったという事実が、他人事には思えませんでした。現在の北朝鮮のミサイル問題や、安倍政権の元での様々な政策が、太平洋戦争に進んでいった当時の日本のように感じ、いつ私達が戦争に行かなければならなくなるかわからない現代の状況に危機感をおぼえました。現代の学生は、自分達が徴兵され戦争に行くとは考えていませんが、当時の学生も同じように考えていたのではないかと、思いました。それでも戦争に行かなければならないと決まったときには、親や友人や恋人など、本人以外も苦しく悲しい想いをしたんだろうと思います。現代の日本では、諸外国との関係や、自国内で、戦争に発展するかもしれない様々な課題を抱えていて、二度と大学から学生を戦地に行かせてはいけなく、そのためには我々学生自身が物事を考えていかなければならないと思いました。戦後の大学で行われてきた学生運動という活動も、学生が過去の大学で行われた学徒出陣や、戦争の歴史を知っているからこそ、学生ひとりひとりが考えて行動した結果なのだと理解しました。現代の学生は 学生運動をしてきた学生みたく能動的な学生は少ないと思います。これでは権力者に上手く利用されてしまう危険があると思います。権力者に利用されてしまわないように、物事を深く考える習慣をつけたいと思いました。」（F君 3年生 男性）
- ⑦ 「とてもいい経験になったと感じました。実際に学徒出陣した方からの生の意見を聞くことで当時の生活の様子や自分自身が今まで知らなかったことを知ることができたと思いました。（中略）僕が一番感じたことは戦争で亡くなっていった方の想いを如何に考え伝えて

いくかだと思いました。二度と戦争を起こしてはいけないのか、戦争に負けてはいけないなど人それぞれ考えることは違うと思いますが、先人の思いを忘れず私たちとは関係がないと切り離さずにしっかりと考えていくことが大事ではないかと思いました。」(G君 4年生 男性)

- ⑧ 「今回のように自身の生活において身近な人の実体験を知ること授業や本ではできない貴重な経験であった。特に当時の学徒出陣に参加した方々の一覧の一人一人の出身地、当時の様子を見ると授業や本の中の遠い存在だった当時の方々がぐっと近い距離になっていく気がした。特に今回は自分の所属している大学の卒業生が当時は同じ年齢で戦争へと赴いていたことを考えると、戦争と自分とをより身近な出来事のように考え知る機会となった。(中略) 歴史を様々な側面から知ることが大切であると感じた。そのためにも、授業や本だけでなく自分自身で当事者の声を聞くことが歴史を知ることに対する多方面からの検討になるのだと感じた。」(H君 4年生 男性)

この①～⑧の感想文を大きく分類してみていくと、だいたい三つぐらいに分類できるように考えられたので、それに従ってみていくと以下ようになる。

まず①②⑦⑧の感想は、戦争と学徒出陣を考える情報を得られたというものであり、③④⑤と②は反戦や平和の大切さとともに、平和を維持するための義務を負っていること、戦争の愚かさや残酷さから戦争を2度と起こすことなく戦争の悲惨さを風化させてはならないという意識や意見を考えるに至ったという感想であった。⑥は学生として現在の政治や権力への対応を考え、物事を深く考える習慣をつけたいとの問題意識の気づきとしてその感想を集約できるように考えられる。

いずれにしても、感想文を提出した学生たちはこれまでほとんど学徒出陣について具体的に知らない状況の中で学徒出陣調査事業の最終報告会に参加し、出陣学徒兵の記憶にもとづく話を聞き取り調査に当たった担当者を通して間接的に聞くことによって、それぞれ戦争の愚かさや平和維持の責務や大切さ、さらに政治や権力の監視など様々なことを考え学んでいたことが看取できる。

おわりに

以上、本稿では、まず戦後50年を契機に各大学が組織的に取り組むようになってきた学徒出陣調査とその成果に明らかにし、次に法政大学の学徒出陣調査事業の概要を述べ、インタビュー調査の対象となった法政大学出陣学徒の姿をイメージできるよう調査成果にもとづき法政大学の出陣学徒像を提示した。そして最後に法政大学の学徒出陣調査事業の最終報告会での座談会における登壇者の発言とそれを聞いた参加学生がどのように受け止めたのか、彼らが座談会参加後に作成した感

想文を紹介し、学徒出陣の記憶をどのように受容していたのかを分析し検証した。

ここでは、その検証結果を踏まえ、以下、法政大学での学徒出陣調査事業を事例に「記憶」による語りの構造を明らかにし、その構造にもとづき「記憶」が伝承されることによって一つの出来事が聞き手に認識され受容されてきている状況を考察し本稿のまとめとする。

今回検証対象とした学徒出陣の記憶は、法政大学の調査事業の一環で語られた「記憶」であり、調査担当者(大学史委員)が被調査者(学徒出陣体験者)を訪ね、事前に用意した質問内容(項目)にもとづきその時の会話の流れに沿ってインタビューし、基本的には聞き取った内容を半構造化する形式で行い、それを紙媒体に「記録」したものである³²。そのため当該座談会で語られた「記憶」は、学徒出陣体験者が戦時下の学徒出陣という出来事を体験した直後に記憶していた「記憶(a)」をその後70年という期間の政治・経済・社会の状況、さらに自身の価値観の変化などの中で変質したと考えられる「記憶(b)」を「記録」化したものを語った「記憶(c)」と、あるいはインタビュー時の語りの「記憶(b)」を調査担当者が学徒出陣者の証言として聞いた記憶を転化させて間接的に語った「記憶(d)」である。

そのような形で伝承された学徒出陣の「記憶」に対し学生たちが書いた感想文がどのようなものであったのかを検証していくと、本稿の3の(2)(3)で明らかにしたように個別エピソードに対する感想とともに座談会全体を通して語られた内容から、①戦争や学徒出陣を身近な出来事と感じそれらをイメージすることができ、戦争や学徒出陣の事実を考える貴重な体験になったと捉える学生、②反戦や平和の大切さとともに平和維持の責務を意識するようになった学生、さらに③現状の政治への危機感や自らの行動に想いを募らせる学生など、学徒出陣の記憶が様々な形で認識され受容されることによって、平和を考え政治や権力のあり方を考える契機にまで至っている状況が理解できた。このように学徒出陣という歴史的出来事が、体験した者の個々の記憶がたとえ変質し伝承され間接的に語られたとしても、それを聞いた者にはその出来事がいろいろな形で認識され、記憶が受容されることによって大きなインパクトを与えてきていることがわかる。同時にこのことから学徒出陣の記憶を人権問題を考える「平和教育」³³の教材として活かし得る意義は十分あるものとも考える。それらのことを指摘して本稿のまとめとする。

³² その紙媒体に記録したものは、『学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下）第1分冊』（2018年3月）、『学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下）第2分冊』（2018年3月）として刊行されているが、それらの報告書に掲載されている「証言」は、インタビュー調査で聞き取った話を、テープ起こし（＝「素起こし」）したものを調査担当者が「ケバ取り」し「整文」化し時系列的に配列し編集したものである。しかし一部には聞き取った話を「ケバ取り」し「整文」化しただけのものもある。

³³ 筆者は平和教育の「平和」は、現行の日本国憲法の三大原則やその精神を活かすことによってもたらせられる平和と考えている。

〔謝辞〕

本稿は法政大学が2012年度から2017年度まで6ヵ年の歳月をかけて筆者も関わり実施した「法政大学と学徒出陣」事業で得られた成果を一部利用させていただき執筆したものである。

このため同事業を担当していた大学史委員会委員の奥武則、根崎光男、高柳俊男、小林ふみ子、梅崎修、鈴木智道の諸先生方をはじめ、法政大学史センターの平塚眞樹総長室長ならびに宮脇典彦前総長室長、藤野吉成、鈴木弘一、山口芳江、秋山彩子、古俣達郎、庄司武史、田口雅勝の各氏に対しこの場を借りて改めて謝意を表する次第である。また本稿執筆にあたり法政大学以外の学徒出陣調査の成果などについては、同大学史センターの北口由望氏から情報をいただいた。併せて御礼を申し上げる。

法政大学学徒出陣・勤労働員聞き取り者一覧表

番号	氏名	生年月日	聞取り実施年月日	聞取り時年齢	出身地	法政入学年月日	法政入学学部など	大学生生活	法政卒業年月日	法政卒業学部など	出陣壮行会参加の有無	入隊前の法政在籍	入隊年月日	入隊時の年齢	復員年月日	軍隊年数	部隊名(配属先)	主な任地	終戦時の赴任地	軍隊での経歴・体験	復学年月日	戦後の主な経歴
1	酒井日慈(実)	1919/5/6(T.8)	2012/10/23	93	東京市浅草区	1936/4/1(S.11)	予科第1部	新劇運動	1941/12(S.16)	法文学部文学科		5年	1942/2/1(S.17)	22	1946/3/1(S.21)	4年1ヶ月	東部第101連隊(東京赤坂)	中国南京	中国南京	南方警備隊		池上本門寺貫首
2	関 貢	1920/1/1(T.9)	2015/7/24	95	神奈川県足柄上郡	1940/4/1(S.15)	専門部第二部政治経済科	働きながら通学	1942/9(S.17)	専門部第二部政治経済科		1年6ヶ月	1942/9/29(S.17)	22	1947/8/27(S.22)	4年11ヶ月	近衛師団歩兵第2連隊(東京竹橋)	スマトラ島	スマトラ島	1943.4 南方へ出発		国鉄職員
3	立花通夫	1919/1/1(T.8)	2013/2/2	94	東京市麹町区	1939/4/1(S.14)	予科第2部	陸上部	1943/9(S.18)	経済学部経済学科	仕事で不参加	4年5ヶ月	1944/1(S.19)	25	1945/8(S.20)	1年7ヶ月	満洲移動の旭川の部隊(満洲)	満洲で入営	朝鮮の済州島			法政大学職員
4	行待明夫	1921/8/13(T.10)	2012/9/7	91	京都府竹野郡	1939/4(S.14)	予科第2部	自由な寮生活	1943/9(S.18)	経済学部経済学科		4年5ヶ月	1944/2/1(S.19)	22	1945/8(S.20)	1年7ヶ月	中部38部隊(三重県久居)	松江	愛知県小牧	飛行機エンジン整備		京都府庁
5	清家豊雄	1924/2/21(T.13)	2012/9/14	88	愛知県名古屋市	1941/4(S.16)	専門部高等商業部	剣道部	1943/9(S.18)	専門部高等商業部		3年6ヶ月	1944/10(S.19)	(志願)20	1945/10(S.20)	1年	前橋陸軍予備士官学校(東部83部隊)	千葉県柏	千葉県柏			平和紙業(株)
6	一色義雄	1921/12/23(T.10)	2014/8/21	92	東京市渋谷区	1939/4(S.14)	専門部第二部高等商業部	働きながら通学	1944/9(S.19)	法文学部政治経済学科		3年6ヶ月	1943/12/1(S.18)	21	1945/8(S.20)	1年9ヶ月	東部第12部隊(近衛野砲3連隊)	満洲	千葉県八日市場			東急電鉄
7	伊藤喜美	1922/2/9(T.11)	2014/2/14	92	岐阜県恵那郡	1942/4(S.17)	法文学部政治経済学科	図書館で読書	1944/9(S.19)	法文学部政治経済学科	不参加	1年8ヶ月	1943/12(S.18)	21	1945/8(?)	2年8ヶ月	中部第4部隊(岐阜)	東京中野	名古屋	豊橋予備士官学校・陸軍中野学校		スーパー経営
8	上島武雄	1922/11/18(T.11)	2013/6/17・24	90	東京市本郷区	1940/4/1(S.15)	予科第2部	英語習得に励む	1944/9(S.19)	法文学部政治経済学科		3年8ヶ月	1943/12/10(S.18)	20	1945/8/24(S.20)	1年8ヶ月	横須賀第2海兵団(横須賀)	土浦	茨城県百里原			オーディオ会社経営
9	島崎晃	1921/10/29(T.10)	2015/3/26	93	熊本県八代郡	1942/4(S.17)	法文学部政治経済学科	珊瑚会に参加	1944/9(S.19)	法文学部政治経済学科		1年8ヶ月	1943/12/10(S.18)	22	1946/7/2(S.21)	2年7ヶ月	佐世保第二海兵団(佐世保)	ジャワ	レンバン島			日華油脂勤務
10	江藤正	1921/5/9(T.10)	2013/9/22	92	福岡県京都郡	1940/4/1(S.15)	予科第2部	野球部	1944/9(S.19)	経済学部経済学科		3年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	22	1946/3(S.21)	2年4ヶ月	西部第72部隊		台湾	阿城予備士官学校(満洲)		南海ホークス
11	櫻井眞一郎	1922/5/22(T.11)	2013/7/25	91	群馬県碓氷郡	1940/4/1(S.15)	予科第2部	軟式野球部	1944/9(S.19)	経済学部経済学科		3年8ヶ月	1943/12/10(S.18)	21	1945/8/24(S.20)	1年8ヶ月	横須賀第2海兵団(横須賀)	土浦	茨城県百里原			日新興商勤務
12	田中三郎	1922/1/5(T.11)	2013/11/25	91	東京市向島区	1940/4/1(S.15)	予科第2部		1944/9(S.19)	経済学部経済学科	用事で不参加	3年8ヶ月	1943/12/10(S.18)	21	1945/8(S.20)	1年8ヶ月	横須賀第2海兵団(横須賀)	鹿児島県出水	山形県神町			東洋端子勤務
13	橋口虔一	1922/1/1(T.11)	2015/9/10	93	佐賀県杵島郡	1940/4(S.15)	予科第2部		1944/9(S.19)	経済学部経済学科	帰省で不参加	3年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	21	1946/8(S.21)	2年8ヶ月	西部第54部隊	シンガポール	台湾			NEC
14	古市實	1922/3/30(T.11)	2012/9/6	90	埼玉県北埼玉郡	1939/9(S.14)	専門部政治経済科	射撃部主将	1944/9(S.19)	経済学部経済学科		4年3ヶ月	1943/12/1(S.18)	21	1945/12(S.20)	2年	近衛師団歩兵第3連隊(東京六本木)	宇都宮	各務原	各務原飛行場指導教官		会社経営
15	田端豊	1923/6/13(T.12)	2013/3/15	91	東京市芝区	1942/4(S.17)	専門部政治経済科		1944/9(S.19)	専門部政治経済科		1年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	22	1946/6(S.21)	3年	近衛師団歩兵第5連隊補充隊(佐倉)	シンガポール	シンガポール	前橋陸軍予備士官学校		電化製品販売
16	芳野東一郎	1925/4/1(T.14)	2015/9/4	90	東京市麹町区	1942/4/1(S.17)	専門部高等商業部	副学生長	1944/9(S.19)	専門部高等商業部		2年6ヶ月	1944/10/10(S.19)	19	1945/8/15(S.20)	7ヶ月	仙台陸軍予備士官学校			(病気で退校)		文化工業勤務
17	小村茂	1923/2/6(T.12)	2014/3/28	91	朝鮮	1942/4/1(S.17)	予科第1部	自由な寮生活	1944/9(S.19)	予科第1部	覚えていない	1年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	20	1945/8(?)	1年8ヶ月	野戦重砲第7連隊(東京三宿)	札幌	栃木県黒磯			バッテリー会社経営
18	相澤猛	1924/2/16(T.13)	2015/6/4	91	千葉県匝瑳郡	1941/4/1(S.16)	予科第2部	剣道部	1945/9(S.20)	経済学部経済学科		4年	1945/3/29(S.20)	21	1945/9/11(S.20)	6ヶ月	東部第55部隊(金沢市)	九十九里	千葉県佐原	穴掘り	1945/9/30	中央労働委員会
19	上野順	1925/1/22(T.14)	2015/7/22	90	長崎県長崎市	1943/4/1(S.18)	専門部大陸部		1945/9(S.20)	専門部大陸部	覚えていない	1年9ヶ月	1945/1/10(S.20)	19	1945/10/16(S.20)	10ヶ月	錦2445部隊(高知)	満洲東安	高知		1945/10/16(?)	松庫商店
20	大野眞廣	1924/2/29(T.13)	2012/8/27	88	熊本県玉名郡	1941/4/1(S.16)	予科第2部	剣道部	1946/9(S.21)	経済学部経済学科	見送る	3年5ヶ月	1944/9(S.19)	20	1945/10/16(S.20)	1年	霞ヶ浦海軍航空隊(土浦)	松山	美幌		1945/9/30	九州産業交通
21	大野友清	1926/10/6(T.15)	2015/3/11	88	熊本県玉名郡	1944/4/1(S.19)	専門部高等商業部	射撃部	1947/3(S.22)	専門部高等商業部		1年4ヶ月	1945/5(S.20)	18	1945/9 初旬(S.20)	1年1ヶ月	彗8063部隊(下関)		九州部崎(へさき)		1945/9/26	肥後銀行
22	知和静夫	1924/7/13(T.13)	2014/10/16	90	広島県双三郡	1942/4/1(S.17)	予科第2部		1946/9(S.21)	経済学部経済学科		2年7ヶ月	1944/10/25(S.19)	20	1945/11(S.20)	11ヶ月	豊橋第1陸軍予備士官学校	山口県	広島(?)		1945/12/1	法政第1高校教員
23	野村謙三	1923/7/31(T.12)	2015/6/10	91	東京市渋谷区	1941/4/1(S.16)	予科第2部	自転車競技部	1946/9(S.21)	経済学部経済学科	不参加	2年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	20	1945/8/30(S.20)	1年8ヶ月	東部第52部隊	金沢	(?)		(?)	日加工業
24	福島明	1924/5/28(T.13)	2014/11/29	90	東京市牛込区	1942/4/1(S.17)	予科第2部		1946/9(S.21)	経済学部経済学科		3年	1945/4/1(S.20)	20	1945/8(S.20)	8ヶ月	東部83部隊(佐倉)	佐倉	佐倉(?)	幹部試験不合格	1945/9/30	法政第1高校教員
25	吉田謙	1924/10/18(T.13)	2014/12/10	90	東京市大森区	1942/4/1(S.17)	予科第2部		1946/9(S.21)	経済学部経済学科		3年	1945/3/29(S.20)	20	1945/9/10(S.20)	6ヶ月	東部第48部隊(富山)		千葉県銚子		1945/9/30	海苔問屋社長
26	水野雅之	1926/9/30(T.15)	2014/11/16	88	千葉県四街道市	1944/4/1(S.19)	航空工業専門学校	入隊志願	1947/3(S.22)	工業専門学校		1年	1945/4/1(S.20)	(志願)18	1945/8/23(S.20)	5ヶ月	滋賀海軍航空隊(予備生徒)		茅ヶ崎		1945/10/1	岡山県庁

番号	氏名	生年月日	聞取り実施年月日	聞取り時年齢	出身地	法政入学年月日	法政入学学部など	大学生生活	法政卒業年月日	法政卒業学部など	出陣壮行会参加の有無	入隊前の法政在籍	入隊年月日	入隊時の年齢	復員年月日	軍隊年数	部隊名(配属先)	主な任地	終戦時の赴任地	軍隊での経歴・体験	復学年月日	戦後の主な経歴
27	保田英男	1925/2/26(T.14)	2015/8/27	90	東京市蒲田区	1943/4/1(S.18)	予科第1部		1947/3(S.22)	工業専門学校	参加	2年4ヶ月	1945/8/1(S.20)	20	1945/8/18(S.20)	18日	航空隊	千葉県南柏	千葉県南柏	整備兵	1945/10/1	日本コロムビア
28	入山廣平	1925/2/1(T.14)	2014/12/15	89	東京市荒川区	1942/4/1(S.17)	予科第1部		1947/9(S.22)	経済学部経済学科		2年6ヶ月	1944/10/10(S.19)	19	1945/9/9(S.20)	11ヶ月	前橋陸軍予備士官学校(東部63部隊)	甲府	甲府	防空壕掘り	1945/9/25	東京都庁
29	小川昇	1922/9/23(T.11)	2013/4/10	90	埼玉県北足立郡	1941/4(?) (S.16)	専門部政治経済科	山岳部	1947/9(S.22)	経済学部経済学科	中止情報で不参加	3年8ヶ月	1943/12/10(S.18)	21	1945/8/24(S.20)	1年9ヶ月	海軍航空隊(土浦)		百里	訓練	1945/9/30	
30	佐藤行彌	1924/1/3(T.13)	2012/11/14	88	東京市牛込区	1942/4/1(S.17)	予科第1部	ハンドボール部	1947/9(S.22)	経済学部経済学科	参加(?)	2年4ヶ月	1944/9(S.19)	20	1945/8(S.20)	1年	東部36部隊	宇都宮	宇都宮	歩兵	1945/9/30	
31	吉川昌	1923/5/10(T.12)	2014/9/26	91	千葉県香取郡	1941/4/1(S.16)	予科第2部		1947/9(S.22)	経済学部経済学科	知らなかった	2年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	20	1945/8/15(S.20)	2年9ヶ月	陸軍の柏自動車学校	鈴鹿	知覧		1945/9/30	ヤンマー
32	小牧治市	1923/8/7(T.12)	2015/3/27	91	岐阜県本巣郡	1941/4/1(S.16)	専門部法律科		1948/3(S.23)	法学部法律学科	参加	2年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	20	1946/6(S.21)	2年7ヶ月	陸軍68連隊中部第4部隊	シンガポール	シンガポール	経理	1946/7/25	名古屋税関
33	柊原睦	1924/6/19(T.13)	2014/11/16	90	広島県御調郡	1944/4/1(S.19)	予科第2部		1948/3(S.23)	法学部政治学科		1年1ヶ月	1945/5/5(S.20)	20	1945/9/12(S.20)	4ヶ月	広島野砲連隊	山口県	高知後免飛行場近郊	大砲試射	1945/10/26	特定郵便局長
34	植木茂郷	1925/10/17(T.14)	2014/10/28	88	神奈川県横浜市	1943/4/1(S.18)	予科	馬術部	1948/3(S.23)	経済学部経済学科		2年	1945/4/6(S.20)	19	1945/8/30(S.20)	4ヶ月	東部63部隊(甲府)	神奈川県大磯	大磯	陣地構築	1945/9/30	神奈川県警
35	坂本清	1926/1/1(T.15)	2015/6/10	89	東京市世田谷区	1943/4/1(S.18)	予科第2部	陸上部	1948/3(S.23)	経済学部経済学科		2年3ヶ月	1945/7(S.20)	19	1945/9/8(S.20)	3ヶ月	東部37部隊(水戸)		水戸	海岸防備	1945/9/17	税務大学校
36	丸山吉五郎	1925/3/25(T.14)	2013/3/28	88	埼玉県大里郡	1943/4/1(S.18)	予科第2部	陸上部	1948/3(S.23)	経済学部経済学科		1年6ヶ月	1944/10/10(S.19)	19	1945/8(S.20)	10ヶ月	前橋陸軍予備士官学校	水戸	宇都宮		(?)	法政大学(教授)
37	太田惇	1928/3/31(S.3)	2013/11/6	85	神奈川県逗子市	1945/4/1(S.20)	専門部法律科	勤労働員	1948/3(S.23)	専門部法律科											(?)	倉庫会社
38	中島高明	1924/6/26(T.13)	2014/11/10	90	東京府	1945/4/1(S.20)	専門部法律科		1948/3(S.23)	専門部法律科		0ヶ月	1945/4(?)	21	1945/8/15(S.20)	4ヶ月	晴1903部隊(祖師谷大蔵)				(?)	寝具店経営
39	曾我益也	1929/2/20(S.4)	2014/2/12	85	京都府	1945/4/1(S.20)	専門部政治経済科	勤労働員、野球部	1948/3(S.23)	専門部政治経済科												新東宝撮影所長
40	須田耕作	1924/10/12(T.13)	2014/9/29	89	東京府北多摩郡	1942/4/1(S.17)	予科第1部	ハンドボール部	1949/3(S.24)	経済学部経済学科		2年4ヶ月	1944/8/17(S.19)	19	1946/3/21(S.21)	1年7ヶ月	熊谷陸軍飛行学校	北支那	南京	(捕虜生活)	(?)	都議会議員
41	竹内章一郎	1924/6/25(T.13)	2014/10/7	90	東京市下谷区	1942/4/1(S.17)	予科第1部	アリオンコール	1949/3(S.24)	経済学部経済学科		2年8ヶ月	1944/12/1(S.19)	(志願)20	1947/1(S.22)	2年2ヶ月	中部128部隊	満州	満州(安東)	(シベリア抑留)	1945/1/28	自営業
42	坂本一郎	1926/3/17(T.15)	2014/10/22	88	栃木県上都賀郡	1943/4/1(S.18)	予科第2部	射撃部	1949/3(S.24)	経済学部商業学科		2年6ヶ月	1944/10/10(S.19)	(志願)18	1945/9(S.20)	11ヶ月	豊橋第2陸軍予備士官学校	金沢→富山	銚子近郊(飯岡)	塹壕掘り	1946/1/1	三菱銀行
43	湯浅信雄	1923/11/21(T.12)	2015/6/22	91	東京府荏原郡	1942/4/1(S.17)	専門部政治経済科		1949/3(S.24)	経済学部経済学科	参加	1年8ヶ月	1943/12/1(S.18)	20	1945/9/1(S.20)	1年9ヶ月	東部第88部隊	相模原	大本営(市ヶ谷)	無線訓練	1946/4/1	証券会社社長
44	黒岩銑三	1925/9/6(T.14)	2014/10/30	89	東京市淀橋区	1944/4/1(S.19)	専門部政治経済科		1950/3(S.25)	法学部政治学科		8ヶ月	1944/12/19(S.19)	19	1946/1(S.21)	1年1ヶ月	中支派遣軍鶏第3063部隊(高崎)		南京	中国各地を転戦	(?)	公立中学教員

(注) この一覧表は『学徒出陣証言集(「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第1分冊』(法政大学 2018年3月)と『 同 (「法政大学と出陣学徒」事業報告書 下)第2分冊』(法政大学 2018年3月)を参照し作成した。なお、それら事業報告書掲載の基礎データは法政大学所蔵の「学籍簿」をはじめ、アンケート調査回収票、聞き取り調査などで得られた情報である。